

温病学の臨床応用

温病学の臨床応用

寇華勝

中国中医科学院望京医院 客員教授

みなさん、こんにちは。本日は「温病学の臨床応用」について話します。

温病学というのは、温病の病因・病理・発展変化の規則および診断・弁証・治療を研究する臨床学科であり、中医学の大切な構成要素です。温病学は感染症に対してよく使います。またそれ以外にも、アレルギー性疾患や膠原病などでも幅広く使います。

温病とは、四時の温熱あるいは湿熱の邪気を患って発病するもので、発熱を主な臨床的特徴とする熱性病を指します。

温病にはさまざまな分類がありますが、病名による分類には春温・暑温・秋燥・冬温・風温・温毒・温疫・温瘧などがあります。発病の形態からみると、新感温病と伏气温病があります。さらに病変の性質による分類には温熱病と湿熱病があります。この分類は日本においてよく使う分類方法だと思います。

■ 温熱病に対する温病学の応用

温熱病の治療では、おもに葉天士がつくった衛氣營血弁証を用います。温熱疾患・感染症・膠原病・アレルギー性疾患などでよく使います。

■ 衛分の証治

衛分の証治の1つは風熱犯衛で、発熱、微悪寒、頭痛、咳、のどの紅腫・痛み、汗が少ない、軽い口渇、舌辺の先が赤い、舌苔薄白、脈浮数がみられます。治法は辛涼清解で、銀翹散・天津感冒片、エキス剤なら清上防風湯を使います。

もう1つのタイプは風熱犯肺で、身熱、熱はそれほど高くない、咳嗽、痰がある、鼻水、のどの不快感、口鼻の乾燥、舌苔薄白あるいは微黄、脈浮やや数がみられます。治法は辛涼宣肺で、桑菊飲をよく使います。

■ 気分の証治

気分の証治は気分熱盛で、高熱、赤ら顔、口がすごく渇く、冷たい水をよく飲む、汗を絶えずかく、呼吸促迫、舌苔黄、脈洪大数がみられます。治法は清熱生津で、白虎湯、エキス剤なら白虎加人参湯を使います。

桑菊飲は辛涼の軽剤，銀翹散は辛涼の平剤，白虎湯は辛涼の重剤といわれています。つまり，辛涼剤における軽い・中等・重いという3つの方剤の使い分けです。

続いて温熱結腑ですが，この場合は身熱，夕方頃の発熱，意識障害，神昏譫語，口渴，便秘あるいは悪臭のある水様便を下す，腹部が脹満疼痛して触られるのを拒む，小便黄色で少ない，舌苔厚黄乾燥ではなはだしい場合は焦げたよう，脈沈実で有力がみられます。治法は瀉熱攻下で，大承気湯を使います。

■ 営分の証治

営分の証治は熱傷営陰で，熱が夜にはなはだしい，口渴がそれほど強くないあるいはまったく口渴がない，心が落ち着かない，はなはだしいときには譫妄狂躁を呈する，皮膚に赤い斑点が現れる，舌深紅で無苔，脈細数がみられます。治法は清営透熱で，この段階では邪気が体のなかに深く入らないよう外へ透出することが大事になります。

■ 血分の証治

血分の証治は血熱動血で，発熱が夜にはなはだしい，狂う，躁動不安，吐血，鼻血，皮下出血，血便，血尿，女性の場合は不正出血で出血量が多い，皮膚に紫黒斑がある，舌紫赤で乾燥，脈細数がみられます。治法は涼血散血で，犀角地黄湯を使います。

さらに陰液消耗の証治ですが，微熱，手掌と足裏の熱が手の甲や足の甲よりも強い，口も舌も乾燥する，心身が疲れる，動悸，眠い，はなはだしい場合には頭がすっきりしない，耳聾，舌が硬い，舌紅，舌苔少，脈虚，脈大，結代で不整脈があります。治法は滋陰清熱で，加減復脈湯，つまり芍薬甘草湯の加減法を使います。

以上，温熱病の治療のポイントは，辛涼薬を使って邪気を外に出し，さらに陰を護っていくことになります。

■ 湿熱病に対する温病学の応用

日本の気候は高温多湿ですから，日本では湿熱の弁証治療は臨床価値が高いと思います。湿熱の弁証は『温病条弁』の呉鞠通がつけました。高温多湿による湿熱病，湿温病，感染症，免疫疾患，アレルギー疾患など病状は多彩であり，病程も長引きます。治療では清熱利湿が頻用されます。

湿熱病に対しては上中下の三焦に分けて治療していきます。

■ 上焦の証治

上焦の証治は，1つは湿滯肌表で，悪寒，発熱，汗が少ない・粘る，頭が重い，頭重，頭痛，体が重い，疼痛，口淡であまり口が渴かない，胸苦しい，ムカムカする，嘔吐，食欲がない，腹鳴，下痢，舌苔白膩，脈濡がみられます。治法は芳香疏散で，芳香薬を使って湿熱を散らします。処方では藿香正气散，五加減正气散をよく使います。

もう1つは湿熱鬱表で，悪寒，発熱，心熱不揚，午後になると熱がはなはだしくなる，顔が淡黄色，頭痛，体が重苦しい，倦怠感，胸苦しい，食欲低下，吐き気，

嘔吐、口は渴くがあまり水を飲みたくない、軟便、尿は黄色で少ない、表情がない、舌苔白やや黄膩、脈濡がみられます。治法は湿熱宣化で、藿朴夏苓湯をよく使います。もしエキス剤でやるなら、茵陳五苓散や半夏厚朴湯を合わせて使ってもいいと思います。

■ 中焦の証治

中焦の証治は、1つは湿熱膠着で、発熱、身痛、発汗とともに熱が下がるが続いてまた上昇する、口は渴くがあまり水を飲みたがらない、あるいはずっと口が渴かない、胸腹部の痞悶、軟便、腹が脹る、舌苔淡黄滑膩、脈濡数がみられます。治法は清化湿熱で、黄芩滑石湯・茵陳五苓散をよく使います。もう1つは、湿熱穢濁で、発熱、倦怠感、頭重、めまい、四肢の痛み、はなはだしい場合は体全体が痛む、胸苦しい、腹脹、吐瀉を繰り返す、小便が少なく深黄色、舌苔黄膩、脈濡数がみられます。治法は解毒辟穢で、甘露消毒丹をよく使います。

また湿重が熱（熱より湿が重い）では、身熱不揚、体が重たい、頭額部だけに汗をかく、全身の倦怠、顔色が淡黄色、胸腹部に痞満、食欲不振、下痢、舌苔白粘稠、はなはだしい場合は潤滑、脈濡緩軟弱がみられます。治法は化湿清熱で、三仁湯をよく使います。もう1つは湿熱挾痰・阻塞心下で、身熱、口は渴くが水をあまり飲みたくない、心下痞満があるが柔軟で圧痛がない、ときに吐き気、嘔吐、食欲があまりない、大便不調、舌質紅、舌苔白膩滑、脈滑数がみられます。治法は清熱燥湿・化痰行気で、『傷寒論』の半夏瀉心湯から人參・乾姜を除いて、枳実・杏仁を加えた処方を用います。この加減半夏瀉心湯は、私の故郷でよく使う方剤で、胃腸が弱い方で湿熱・痰熱がある場合、この方剤はよく効きます。

■ 下焦の証治

下焦の証治は、下焦湿熱では、小便不利、熱が上に蒸されることで頭脹して体が重く痛む、悪心、嘔吐、食欲不振、口渇して水を飲みたがらない、意識朦朧、舌苔白膩、脈濡がみられます。治法は淡滲利湿・芳香開竅で、茯苓皮飲合蘇合香丸を使います。エキス剤なら茯苓飲や茯苓飲合半夏厚朴湯などを使ってもいいと思います。

エキス剤では、柴苓湯・柴陷湯・半夏瀉心湯・平胃散・五苓散・茯苓飲合半夏厚朴湯・薏苡仁湯など湿を除くものを使います。また、湿邪が陽気を遏傷することによって陽気が衰え、熱邪が陰血を消耗することによって陰血が虚損します。つまり気陰両虚になりやすいですから、遷延化する慢性疾患には亀鹿二仙丸を用いる場合もあります。

■ 症例分析

1例をあげて説明します。

■ 症例呈示

【患者】35歳女性

【初診】20××年5月27日

【主訴】 出生時から繰り返す痒みで、この1年悪化している。

【現病歴】 患者が生まれたときに頭頸部に瘙痒があり、小学生・中学生頃は四肢の屈曲部で強くなった。抗アレルギー剤やステロイド剤などで治療し、20代以降はだいたい安定した。しかし、この1年ぐらいは子どもの教育のストレスがあり、瘙痒が再燃している。

【現症】 体全体が痒い。特に頸部・上肢の内側・手首・膝の裏が強い。掻爬した痕があり、掻いた部分がジメジメしている。血痕、手が荒れて痛がゆい、顔面黄色でやや黒い、だるい、口苦、便は軟便・臭い・すっきりしないといった症状もある。舌苔黄膩、脈濡数。

【弁証】 風湿熱滯・壅於肌膚

【治法】 化湿清熱・祛風止痒

【処方】 山帰来 5g, 滑石 6g, 木通 4g, 連翹 3g, 山梔子 3g, 黄芩 3g, 防風 3g, 荊芥 3g, 苦参 3g, 当帰 3g, 生地黄 4g, 甘草 2g

【処方解説】 山帰来・滑石・木通で湿に対応し、連翹・山梔子・黄芩で清熱し、防風・荊芥・苦参で祛風。当帰・地黄は血分から風を鎮めていく。連翹・防風・荊芥は、温病学では透熱転気の意味合いがある。本方剤は、温病学からみれば黄芩滑石湯にあたる。

【治療経過】 上方を14剤飲んでから、ジメジメは改善し、痒みも減り、舌苔も薄黄になった。さらに上方を加減して2カ月半続けると痒みはだいたいなくなり、半年後には肌膚の状態も良くなり治療を終了とした。現在も再発していない。

■ 温病学と一貫堂医学さらに鍼灸について

じつは温病学と日本の後世派・一貫堂医学は近くて、一貫堂の竜胆瀉肝湯は温病学でもよく使います。先ほどの一貫堂医学の荊芥連翹湯と竜胆瀉肝湯と杏蘇散は、温病学でもよく使います。温病学は劉河間・張子和から発展して、一貫堂医学は朱丹溪・李東垣から田代三喜・曲直瀬道三と発展して森道伯に引き継がれていきます。例えば竜胆瀉肝湯には薛生白方と一貫堂医学方があります。両方剤にはそれぞれ特徴があり、薛生白方の竜胆瀉肝湯は、肝胆の湿熱を除くのにいい効果があります。一貫堂医学の竜胆瀉肝湯は解毒・涼血によく使います。

また、温病に対しては鍼灸治療もよく応用します。風池・風府・大椎・曲池・陰陵泉・三陰交・膈腧・血海といったツボを取り、捻転瀉法・呼吸瀉法・提挿瀉法・補法・透天涼などの手技を使います。曲池・委中や舌裏などに瀉血療法もよく使います。

■ まとめ

- 温病の治療原則と方法は日本の風土とよく合い、適応します。
- 衛気營血の証治は、温熱病治療の大綱です。
- 三焦の証治は、湿熱疾患治療の大綱です。
- 温病学と後世派・一貫堂医学は同源異流です。
- 温病の治療原則は鍼灸でもよく適応します。